

古写真の研究と保存

吉田 成

東京大学史料編纂所

はじめに

近年、いわゆる「古写真」に関心が寄せられている。この10数年の間に、幕末・明治期に撮影された写真を集めた写真集等が相次いで出版されたり、古写真展等も盛んに企画・開催され、多くの人々の関心を集めている。また、1999年4月、鹿児島市にある尚古集成館所蔵の銀板写真「島津齋彬像」が写真としては初めて、国の重要文化財に指定された。これらのことは、写真が貴重な文化財、あるいは歴史資料等として重視されるようになったことを示す一つの表れと考えられる。

また昨今、写真の保存・修復に対する関心が高まっている。というのも、貴重な写真史料の多くが、程度の差こそあれ、すでに劣化しはじめているからである。この現実を前にして、私たちは写真を保存することの重要性を再認識したといえるであろう。

写真の発明

現代に生きる私たちは一日として写真を見ずに過ごすことはない。朝起きて新聞を見れば、そこには報道写真が掲載されている。また一歩家を出ると、さまざまなポスターや広告写真等が目飛び込んでくる。このように写真は今、ごくあたりまえのものとして日常生活に溶け込んでいるといえるであろう。

ところで、現代の日常生活にすっかりとけ込んでいる写真、それは何時、誰によって発明されたのであろうか？現存する最古の外界を写した写真「ル・グラの自宅窓からの眺め」（1826～27年頃）は、フランス人のジョセフ・ニセフォール・ニエプス（Joseph Nicéphore Niépce, 1765～1833）によって撮影された（写真1）。この写真術は、アスファルトの感光性を利用した方法で、ヘリオグラフィーと命名された。その後、ニエプスと協力して研究を進めたフランス人画家のルイ・ジャック・マンデ・ダゲール（Louis Jacques Mandé Daguerre, 1787～1851）が、銀板上に画像を形成する方法を完成し、ダグレオタイプ（以下「銀板写真」と称する）と名付けて1839年1月7日に、同じくフランス人の科学者で政治家でもあったフランソワ・アラゴーを介してフランス学士院で公表した。もう一人、写真の発明者として度々名前を挙げられる人物として、イギリス人科学者で後述するカロタイプの発明者であるウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット（William Henry Fox Talbot, 1800～1877）がいる。

写真の発明者として一般に知られているのは以上の三人、すなわちニエプス、ダゲール、そしてタルボットであるが、画像を定着させる方法を考案していたのは彼ら三人だけではなく、その他多くの国々で、ほぼ同じ時期に写真術と同様の技術が考案されていたともいわれている。しかしこれらの数多くの写真術発明者の中で、写真の父として特に賞賛されたのはダゲールであった。その理由としてはいろいろなことが考えられるが、その一つに、銀板写真が持つ美しさを挙げることができよう。ダゲールが完成させた銀板写真は、銅板に銀メッキを施し、沃素の蒸気をあてた感光板を、カメラ（注1）で撮影し、水銀蒸気で現像した後、チオ硫酸ナトリウム（ハイポ）で定着（注2）するという方法で、いわゆる「一点もの」であった。今日、私たちが日常的に使い慣れている写真は、原板から複数のプリントを作ることができる「ネガ・ポジ法」であるが、銀板写真では一度の撮影で一枚の写真しか得ることはできない。しかし金属板上に写し出されたシャープで美しい画像は、当時の人々にとって十分に魅力的なものであったのである。

ダゲールの方法に対して、タルボットは感光性を与えた紙を、小さなカメラに入れて撮影することを試みた。この方法で得られた画像は、明暗が逆になって現れた。これが今日のネガ・ポジ方式の原点で、密着焼き付けをすることにより、明暗の正しいポジ像が得られるというもの。しかしカロタイプ（注3）と命名されたこの方法は、紙ネガを焼き付けてプリントを作るため、紙の繊維が写真に現れ、シャープさが損なわれたことが一因してダグレオタイプほどには普及しなかったのである。

1851年に、イギリス人の彫刻家フレデリック・スコット・アーチャー（Frederick Scott Archer, 1813～1857）によって写真史に新たな展開がもたらされた。ウェット・コロジオン・プロセス（湿板写真術）の発明である。この写真術は、



写真1

撮影者：ジョセフ・ニセフォール・ニエプス

題名：「ル・グラの自宅窓からの眺め」

撮影年：1827年頃

写真技法：ヘリオグラフ

所蔵機関：Gernsheim Collection, Humanities Research Center,
University of Texas, Austin

(写真は、ナオミ・ローゼンブラム 著、飯沢耕太郎 日本語監修、大日方欽一・森山朋絵他訳、1998『写真の歴史』美術出版社 p.19より転載)

ガラス板の上に沃化カリウムを含むコロジオン（注4）をムラなく均一に塗布し、硝酸銀溶液に浸して感光性を与えた後に、すぐに撮影し、露光後ただちに焦性没食子酸または硫化第一鉄で現像し、ハイボもしくはシアン化カリウムで定着する。この方法は、すべての工程を、ガラス板が湿っている間に行わなければならなかった（注5）ことから、日本では湿板写真術と呼ばれた。湿板写真は、ダゲレオタイプと比較して感光度が高く、露光時間を大幅に短縮することができた。初期のダゲレオタイプが露光するのに20～30分必要だった（注6）のに対し、湿板写真は5～15秒に短縮されたのである。このような露光時間の短縮は、写真表現の可能性を大きく拡大し、ポートレートの撮影等を容易にしたが、湿板写真は、常に暗室一式を携帯しなければならないという欠点があった。

1871年、イギリスの医師で顕微鏡に関心をもっていたリチャード・リーチ・マードックス（Richard Leach Maddox, 1816～1902）博士が、ガラス板を支持体とし、コロジオンのかわりにゼラチンをバインダーに用いた臭化銀乳剤の実験結果を発表した。この方法は発表当初、あまり注目されなかったようであるが、2年後には、別の何人かのイギリス人がこの方法を改良し、ゼラチン乳剤の商業的生産を始めた。この方法の考案により、写真家は暗室を携帯する必要がなくなったばかりでなく、自ら感光材料を作らなくてすむようになった。また、1秒以下の露光が可能となって、事物の瞬間を捉えることができるようになったのである。

日本の写真小史

日本に写真術が渡来した（輸入）のは嘉永元年（1848）で、場所は長崎、輸入者は上野俊之丞であったとするのが現在のところ最も有力な説である。写真術の渡来期には、銀板写真の研究は、蘭学による西洋新知識の導入および諸科学研究の重要な項目の一つとして、幕府や藩の諸機関で行われ、当初は、薩摩藩が銀板写真研究の指導的役割を果たした。日本の銀板写真時代は、次の湿板写真が輸入されるまでの約10年間という短い年月であり、各藩における試行の時代ともいうべきものであった。日本人が日本人を写した銀板写真としては、薩摩藩の市来四郎らが撮影した「島津斎彬像」が、現在のところ唯一点発見されている（写真2）。この写真は、冒頭でも述べたように平成11年に、写真としては初めて国の重要文化財に指定された。その他、外国人写真家による撮影のものを含め、日本人を写したダゲレオタイプ、および日本の風景を撮影した銀板写真のうちで、現在、所在の明らかな銀板写真の数は表で示す通り非常に限られている（注9）。

こうした理由から、日本における写真の実際上の幕開けは、湿板写真からといわれている。湿板写真は前述したように1851年に発表された写真技法で、コロジオンをひいたガラス板を硝酸銀に浸して感光性を与え、ぬれているうちにカメラにセットして撮影し、現像しなければならなかった。湿板写真の日本への導入は、安政年間に、長崎、横浜、函館という三つの開港場、すなわち幕末の西欧新文化の導入口からなされた。湿板写真術が導入された当初は、蘭学愛好の各藩の蘭学者たちが中心となって研究を行っていたが、やがて大衆の中から写真を習得し、職業とする者が現れた。

これら三つの写真導入口のうち、長崎からの湿板写真伝習の実際は、安政4年（1867）に、ポンペ（注10）が来日したことによってもたらされたといわれている。長崎では、松本良順、前田玄造、上野彦馬、古川俊平らが、ポンペの指導の下で舎密学（化学）の一項目として写真の研究を開始した。もっとも、ポンペは写真術に関する十分な経験を有しておらず、写真研究の指導者というよりは、協同研究者であったようである。



写真2

撮影者：市来四郎 他

題名：「島津齋彬」

撮影年：安政4年（1857）9月17日

写真技法：銀板写真

所蔵機関：尚古集成館

（写真は、渡辺義雄・小西四郎 監修、小沢健志 編集、1994『幕末・写真の時代』筑摩書房 p.17 より転載）

また長崎以外では、横浜で、下岡蓮杖がアメリカ人職業写真師ウンシン（注11）から、函館では木津幸吉がロシア領事ゴシケヴィッチ（Iosof Antonovichi Goskevich, 1814～1875）から湿板写真の伝習を受けた。以後、湿板写真時代は明治半ばに乾板が輸入されるまで続いた。写真を初めて職業としたのは、文久2年（1862）に横浜で下岡蓮杖が、同じ年長崎で上野彦馬が開業したのが日本の最初だといわれている。後に「東の下岡蓮杖、西の上野彦馬」となれば称されたこの二人は、ともに職業写真家の開祖であり、多くの門下生を育成し、幕末・明治期に大きな影響を残した先覚者といえよう。また京都では、堀与兵衛が寺町通りに写真場を創業した。開業年代は慶応元年（1865）であったといわれ、幕末政変の渦中にあった歴史的人物や、無名の人々を、京の風俗とともに写真に残した。

明治中期になると、写真の歴史は湿板写真の時代から乾板写真の時代へと移り変わった。このような技術の進歩は、写真表現の内容を変化させ、写真の歴史は一つの大きな転換期を迎えたといえることができる。明治16年（1883）、江崎礼二は新輸入の乾板写真法で水雷爆発の水煙の瞬間等を撮影することに成功した。これを契機に乾板写真が普及し、明治20年代の前半頃までには湿板写真はほとんど見られなくなったといわれている。湿板写真を野外で撮影するためには、技術的な理由から、大型カメラ・薬品・現像器具一式、さらには暗室までも持ち運ばなければならなかった。しかし乾板時代を迎え、暗室を携行する必要がなくなり、また感光性は、はるかに早くなった。乾板写真の輸入によって、日本の写真史は次の時代へと大きく移り変わったのである。そして乾板時代の新たな主役は、秘室相伝の時代の大家たちから、若手の写真師へと移り変わった。彼らの中には、直接欧米に留学して新知識や新技術を吸収した者もいた。また、中央志向の傾向は一層強まり、優れた写真師が東京に集中して互いに競い合う時代となった。当時の東京では、鈴木真一、江崎礼二、清水東谷、二見朝隅、丸木利陽、中島待乳等、まさに絢爛たる顔ぶれの写真師たちが競い合いながら活躍していたのである。ちなみに当時の写真代金の一例を挙げると、手札判、鈴木真一・1円、二見朝隅・1円、江崎礼二・75銭、丸木利陽・50銭、開業早々の小川一真は50銭であった。

このように乾板写真が導入され、露光時間が大幅に短縮されたということは、表現の領域を一挙に拡大することとなり、新しい表現の試行が写真師に求められた。しかし、明治中・後期の写真師たちの多くは技術的には優れていたが、写真表現に対する深い洞察や追究を行ったとはいえない。彼らの仕事は、肖像、名勝風景、役者、芸妓等営業目的の写真がほとんどであった。外国人旅行者のお土産品として数多く売られ、絵葉書写真の原形ともいわれる「横浜写真」が流行したのもこの頃である。横浜写真の多くは、名勝風景、社寺、風俗、人物等の写真に絵の具で美しく着色された。またその多くが、表紙を蒔絵づくりの豪華なアルバムに仕立てたことから「蒔絵アルバム」とも呼ばれて外国人旅行者の、本国への最適なお土産として、数多く売られた。しかし写真表現という観点から見れば、西欧人の求める東洋の神

表. 日本人、および日本の風景を写した銀板写真

(1) 日本で写された日本人	撮影者	撮影時期	所蔵(者)・寄託機関
「島津齋彬」	市来四郎ら	安政4 (1857) 年	尚古集成館
「松前藩用人遠藤又左衛門と従者」	E.ブラウン・ジュニア	安政元 (1854) 年	横浜美術館
「松前藩家老松前勘解由と従者たち」	E.ブラウン・ジュニア	安政元 (1854) 年	松前町郷土資料館
「松前藩奉行、石塚官蔵と従者たち」	E.ブラウン・ジュニア	安政元 (1854) 年	石塚茂之助氏
「浦賀奉行所与力、田中光儀」	E.ブラウン・ジュニア	安政元 (1854) 年	東京都写真美術
「名村五八郎」	E.ブラウン・ジュニア	安政元 (1854) 年	ビショップ博物館
「黒川嘉兵衛」	E.ブラウン・ジュニア	嘉永7 (1854) 年	日本大学芸術学部
「眉毛和尚」(玉泉寺 住職)	A.F.モジャイスキー	安政元 (1854) 年	玉泉寺(下田)
(2) 外国で写された日本人			
「野々村市之進」	C.D.フレドリックス	万延元 (1860) 年	東京都写真美術館
「安田善一郎為政」(注7)	C.D.フレドリックス	万延元 (1860) 年	東京大学史料編纂所
「ダゲレオタイプに写された侍」(注8)	撮影者不詳	1850年代	川崎市市民ミュージアム
「ダゲレオタイプに写された侍」	撮影者不詳	1850年代	川崎市市民ミュージアム
「ニューヨークで発見された日本人像」	撮影者不詳	1850年代	横浜美術館
「ニューヨークで発見された日本人像」	撮影者不詳	1850年代	横浜美術館
(3) 日本を写した風景写真			
「日本の風景」	撮影者不詳	安政2～5 (1855～58) 年頃?	ジョージ・イーストマン・ハウス 国際写真美術館

秘性、異国的趣味に迎合した商業性の強い内容(注12)であったといえる。

明治中期の乾板時代、写真師たちの情熱が写真表現よりも営業に向けられていた頃、写真表現への追求は、職業写真師に代わって、新しく誕生したアマチュア写真家が担う時代になっていった。その理由としては、技術的に平易になったこと、機材が軽量化されて便利になったこと等が挙げられる。また、こうした新技術は、写真雑誌や講義録の出版等によって公開され、趣味的な写真撮影の試みがアマチュア写真家に浸透し、その数は急増していった。もっとも、当時はカメラ等の機材が高価だったため、初期のアマチュアは、経済的にゆとりのある華族や高級官僚、豪商、医者、大学教授等の一部の上流階層に限られていた。この頃の啓蒙的指導者としては、東京帝国大学のお雇い外国人教授W.K.バートン、C.D.ウエスト、石川巖教授らの学者たちが活躍した。彼らは小川一真、丸木利陽らとともに、明治22年(1889)、東京、横浜のアマチュアを中心とする写真団体「日本写真会」(会長：榎本武揚)を創立した。次いで明治26年(1893)、明治の写真大尽といわれた鹿島清兵衛らの提唱で「大日本写真品評会」が、また華族だけの会員による「華族写真会」等が次々に創立され、写真技術、写真材料の紹介、写真芸術の研究等が進められていった。

大正期になって、アマチュア団体の活動は、第一次世界大戦と戦後の社会的変動の影響で一時沈滞した。しかし経済の復調とともにアマチュア団体が増加し、大正後半期には、写真はさらに普及し、やがてアマチュア写真の隆盛期を迎えて、いわゆる「芸術写真」(注13)が流行した。

1920年代のアマチュア写真界は、欧米の技術をいち早く導入して、内容・技術ともに進歩した。技法的にはゴム印画、ブロムオイル印画等が流行し、内容的には、軟調描写の雰囲気を求める作画が主流となった。日本における「芸術写真」は第二次世界大戦後の「リアリズム写真運動」の強い影響力等によって批判され、やがて終焉することになる。

また、この頃の特徴のひとつとして、新聞社の写真界への影響を見逃すことはできない。朝日新聞・毎日新聞の二大新聞社は、全国規模の写真行事の開催、写真雑誌の発行等といった活動を展開した。こうしたことが新聞社の写真界への貢献のはじまりであり、その流れは今日まで続いている。

古写真研究、その方法と課題

さて、以上のように、日本には約150年に及ぶ写真の歴史があり、日本の写真史に関する優れた研究書(注14)も出版されている。しかし、その数は決して多いとはいえず、また古写真学(注15)、写真史科学、写真鑑定学等といった分野は、未だ確立されていないのが現状である。しかし前述したように、近年、日本においても写真を、歴史学をはじめとする様々な分野の研究資料として活用しようとする社会的要求が高まってきている。その意味で、今後は古写真の

調査・研究法を確立してゆくことが必要である（注16）。

また、最近ではデジタル技術を活用し、古写真のデータベースを構築して研究機関や研究者同士の情報交換を盛んにしたり、一般に公開されるようになってきている。例えば長崎大学では、横浜写真を中心とした古写真のデータベースを構築し、一般に公開している。同大学の古写真データベースのサイトは英訳もされていることから、海外からのアクセス件数も非常に多い。また、筆者が所属している東京大学史料編纂所では、同画像史料解析センターのプロジェクト研究の一つとして、1998年度から古写真の研究とデータベース構築を開始し、随時、研究成果を公開している。こうした現状を踏まえ、今後は、データベース構築とインターネットによる公開を前提とした古写真の調査・研究法を確立してゆく必要があろう。以下に、筆者が写真技術史の立場から、現状で考えている古写真の調査・研究の要点と課題等について述べる。

（1）被写体による分類・整理

古写真を研究する場合には、まず、写真を被写体によって分類・整理する必要がある。これまでに出版された古写真集等を見ると、人物・風景・生活・風俗・事件・戦争・建物等といった分類・整理がなされている。このような分類・整理は、写真を見る以前に概ね写っている内容が想像できるという点においても大変便利な方法だといえる。しかし、データベース構築とインターネット公開を前提として考えると、こうした分類にも検討の余地がある。書物の場合には、読者がページをめくりながら目的の写真を探すという作業を比較的自然に行うことができるので、これまでの分類で問題はないと思われる。しかしインターネット公開を前提とした場合には、膨大な古写真のデータに対して、不特定多数の利用者がアクセスしてくるので、利用者が、どのような目的で、どのようなルートでデータを検索してくるのか予測が付きにくい。こうした理由から、複数のカテゴリーにまたがる可能性のあるような古写真には、どこからでも検索できるように分類する必要性が生じてきている。

（2）署名・注記・添付資料等

写真を調査・研究するための有力な手がかりの一つとして署名等の有無がある。しかし写真の場合、署名は画面の外に書かれることが多く、その意味で、写真の署名は撮影者を特定する決定的な証拠とはならない場合もある。しかし例えば、エリファレット・ブラウン・ジュニア（Eliphalet Brown, Jr. 1816～1886）の銀板写真の場合には、画面内に、先の尖った道具を使用して、銀板を削るように署名しているものがある。この種の署名は、E・ブラウン・ジュニア撮影のオリジナル写真であることを証明する材料の一つになり得るであろう。

また名刺写真（注17）等の場合には、台紙の裏に写真家の名前やスタジオ名、住所、撮影年等が印刷されていることがある。これらの情報は撮影年月日を特定したり、撮影者や被写体を特定する場合等に大変役立つ。

また、このような印刷による情報の他に、撮影者による手書きの注記や添付資料等が付けられた写真も少なくない。こうした手書きの情報も、写真の調査・研究には有効な情報となる。ただし、手書きによる注記・添付資料等は、後年になって第三者が書き込んでいる場合もあり、時には間違った情報が書かれていることもあるので、情報として利用する場合には、十分に注意する必要がある。

（3）形態（ケース・アルバム・台紙の有無等）

写真の形態、すなわちケースや額、アルバムや台紙等によって、その写真が制作された年代や地域等をある程度推定することができる。したがって、銀板写真やアンプロタイプ等のような、ケース入りの写真を調査・研究する場合には、ケースがオリジナルかどうかを観察することは重要である。また例え、それがオリジナルのケースの場合でも、ケースを解体した形跡があるかどうかを十分に調査する必要がある。素人がケースを解体した場合には痕跡が残ることが多く、その場合には不適切なクリーニング等が施されていることもある。

アルバムや台紙等によっても、写真が制作された国や年代を大まかに推定できることがある。また、アルバムや台紙には、写真のタイトルや撮影場所等のデータが書き込まれていることもある。

（4）写真技法の識別

古写真を調査・研究する上で、特に専門的知識が要求されるのが、写真技法の識別である。写真が発明されてから今

日までに、数多くの写真技法が発明、利用されてきた。そうした種々の写真技法の中で、調査・研究対象となっている古写真が、どの技法で撮影されたかを識別することにより、撮影時期等を検討することができる。また特に、古写真をコレクションとして保存しようとする場合には、写真技法によって写真の保存や利用方法等が異なる場合もある。

(5) 写真の保存状態（コンディション）

古写真を収集・保存・利用する場合には、その保存状態を調査する必要がある。あまり劣化が著しい場合には、利用を限定し、必要があれば保護対策等を講じる必要がある。また、写真の保存状態を調査することは、写真の保存の目的以外に重要な意味がある。写真の劣化の状態や程度、劣化の進行方向等を観察することにより、その写真が、どのような環境条件のもとで保存されてきたか等、写真そのものの履歴に関する情報を得ることができる。こうして得られた情報は、写真の史料としての性格を知る手掛かりとなる。また、古写真を調査・研究する際には、劣化の状態や程度が自然にできたものかどうか等を観察することも必要である。

(6) 修復の有無

過去に修復された形跡があるかないかを調査することも、古写真を研究するためには重要である。もしも修復された形跡がある場合には、修復の内容や技術水準等を調査・研究することは、その写真史料の性格を知る上で重大な要素となる。

(7) 寸法

古写真の調書作成には写真の寸法を計ることは不可欠である。とりわけ、銀板写真やアンプロタイプ等のような「一点もの」では寸法情報が重要なことはいうまでもない。しかしそれ以外の場合でも、特に古典印画の場合には密着焼き付けされていることが多く、プリントの寸法を計ることは、原板のサイズを知ることになり、さらに使用したカメラの大きさやフォーマットを知る手がかりとなる。

(8) 歴史考証

古写真を調査・研究する場合に文字史料等による歴史考証をすることは、他の文化財の調査や鑑定の場合と同じように重要である。例えば、歴史上の人物は、日記等の文字史料を残している場合も少なくない。写真は絵画や文学と異なり、記憶や想像では画像を残すことができない。したがって写真を撮るためには、その時、その場所にいないといけない。写真の裏書き等に記された撮影者・撮影場所・撮影年月日等と、日記やその他の文字史料とを照合することは、写されている人物の特定に役立つ。また、風景や建物等を写した古写真を調査する場合には、古地図や古図面等との照合が有効である。

(9) 写真の技術水準

撮影技術やプリント技術、彩色技術等、写真の技術水準に関する精細な調査は、古写真を調査・研究する上で重要なポイントとなる。写真の技術水準は、撮影者の写真史的な位置づけや、写真の性格を知るための手掛かりとなる。

(10) 現地調査

野外で撮影された人物写真や風景写真等の被写体や撮影場所、撮影時期や時間等を特定するために適宜現地調査を行う必要がある。

(11) 他の写真との比較

撮影者や被写体、撮影場所等がすでに特定されている他の写真と比較することにより、調査対象となっている写真史料の撮影者や被写体、撮影場所等を特定できることがある。

(12) 写真の出所

古写真が他の文字史料等と同様に、当該写真と関係のある子孫の家等から出てくることがしばしばある。こうした場

合には、伝承や関連史料等から、被写体や撮影者等の特定に役立つ種々の情報が得られることが多い。

写真におけるオリジナルとコピー

以上が、筆者が写真技術史の立場から古写真を調査・研究する場合の要点の概略である。また、研究対象が特に人物写真の場合には、上記の項目の他に、ポーズや構図、スタジオの背景や小道具、モデルとなった人物の服装や髪型等も考慮の対象となる。これらのうちで、人物撮影に使用されたスタジオの背景や小道具等は、撮影者の特定に役立つことが少なくない。人物写真のポーズのつけ方や構図等の類似性等からも、撮影者をある程度絞り込むことができるが、ポーズや構図等には、流行や様式等もあるので、よほど特徴がない限り、これだけで作者を特定することは難しい。また、モデルとなった人物の服装や髪型等は、撮影時期やモデルの身分・年齢・生活等を読み取る場合に貴重な情報となる。

また、古写真を調査・研究する上で重要なポイントとして、写真がオリジナルかコピーかという問題がある。近年、日本においても「オリジナル写真」とか「オリジナル プリント」等といった言葉をしばしば耳にするようになった。しかし、写真というメディアの特殊性のためか、意外にもこれらの言葉は今日もなお、明確に定義がなされないまま曖昧に使用されている。その理由としては、「写真におけるオリジナル」とは一体何かという大きな問題が存在すると同時に、オリジナルという問題を厳密に追求し過ぎると、写真の歴史を完全に辿ることが難しくなってしまうということがあるからである。単純に複写か否かということだけで、オリジナルかコピーかを判断することは難しいのである。銀板写真のように「一点もの」である場合は別として、ネガ・ポジ法による写真は、一枚の原板から複数のプリントを作ることができる。また、写真撮影からプリントまでの流れで、共同作業が存在する場合もある。また制作工程において、技法上、複写という工程を経る写真もある。こうした理由から、現状で、特に古写真に関しては、オリジナル写真という言葉你敢えて柔軟に定義し、必要に応じて専門家が判断するといった状況が生じているように思われる。しかし、今後、古写真を歴史資料として活用する場合には、研究対象の写真がオリジナルか否かを判断することは必要である。写真がオリジナルかコピーかによって得られる情報の質や量が異なるからである。さらに、古写真研究が進み、インターネットで所在情報を公開するような場合には、発信情報が「オリジナル写真」か「コピー写真」のいずれに基づくかを明示する必要があると思われる。オリジナル写真を閲覧する目的で遠方まで出向いて行ったところ、実際は複写であったということは、極力さけなければならないからである。写真におけるオリジナルとコピーの問題は、引き続き検討されるべき課題である。

国際日本文化研究センター所蔵古写真コレクションについて

国際日本文化研究センター所蔵古写真コレクション（以下日文研コレクションと称する）を写真技法別に概観すると、銀板写真、ガラス湿板写真（アンプロタイプ）、ガラス乾板ネガティブ、ガラス乾板写真（ポジティブ、ステレオ）等から構成されている。また写された内容は、人物、風景、生活、風俗、建物、さらに学術研究資料等、多岐にわたっている。

銀板写真は、すべて外国人の肖像写真であり、欧米で撮影された写真と考えられる。現状で、銀板写真をケースの外から観察する限りにおいては、ケースの形状等から、撮影された国や大まかな撮影時期を推定することができる。アメリカ製の銀板写真の場合、プラスマット（ケースのカバーガラスの下に入れられる）と呼ばれる金属製マットに、撮影者が名前や住所等を打刻する場合もあるが、今回概観した限り、日文研コレクションの中には、撮影者の氏名や撮影年月日等を示す文字は見つけられなかった。しかし、今後、ケースを解体（注18）する等の詳しい調査をすることにより、ケース内部に印された注記等を手がかりにして撮影者や撮影地、あるいは撮影に使用した銀板の銘柄等を特定できる可能性もある。

ガラス湿板写真の多くは、明治期に日本人を写した肖像写真であり、日本特有の桐製ケースに収められている。また、桐製ケースの蓋の裏側には墨書による注記が多く見受けられ、今後はこれらの情報を調査解読することにより、撮影者やモデルとなった人物を特定できる可能性がある。こうした点において、ガラス湿板写真は、日文研コレクションの中核をなす貴重な写真史料といえよう。

次に乾板写真である。文献（注19）によれば、一般にガラス乾板の技法が盛んに使われた時期は1920年頃までであるが、小規模には1980年頃まで使用されていた。近年は、眠っていたガラス乾板の調査や保護、デジタル化等が盛んに行われ、ある種のブームにさえなっているといえる。しかしガラス乾板には比較的新しいものも存在し、日文研コレク

ションの中にも昭和初期から昭和10年代に撮影されたガラス乾板も多く含まれている。またコレクションに含まれるガラス乾板ネガの中には、素朴な撮影技術で写された写真も少なくない。これらの写真が専門家によって撮影されたものなのか、あるいはアマチュア写真家が撮影した写真なのかは、今後の調査によって次第に明らかにされると考える。そして、これらのガラス乾板写真は営業写真的な香りが少ないものも多く存在し、それだけに、当時の生活や習慣、あるいは当時の日本の文化を伝える貴重な記録となりうる。また乾板写真の中には、その写真の出所を示すラベルや、被写体を特定するために役立つ注記や添付資料が付された写真が多数存在し、これらの写真は史的価値が高いと評価できる。さらに、写真の来歴を知るためのラベルが貼られている写真や、明らかに京都の建物を撮影したと考えられる写真が含まれている。しかもそれらの写真の中には、建物を特定するための有力な手がかりが写っているものや、添付資料が貼られているものも少なくない。

このように日文研コレクションは主に、銀板写真、湿板写真、乾板写真から成り立っている。それは、写真技術の発達の大きな流れを概観することができる一つの資料群になっている。今回、この資料群は、①写真技法別に分類してID番号を付け、②銀板写真とガラス湿板写真については複写（銀塩写真）を行い、③ガラス乾板ネガについては銀塩写真による密着プリントを作り、④すべての写真をデジタル化し、⑤書誌および画像情報のデータベースを作成した上で、⑥オリジナル写真を包材で保護して収蔵庫に収めるという方式で系統的に整理された。この一環作業は、写真の保存と利用という相反する目的を達成する理想的な方法としても評価される。

おわりに

百の言葉よりも一枚の写真が多くのことを雄弁に語ってくれることがある。幕末・明治期に生きた人の肖像や群像、昔の日本の風景や人々の生活・風俗、歴史上重要な事件・出来事等、これらを写した写真は、今日、私達に多くのメッセージを送り続け、種々の分野の学術資料として見直されてきている。

国際日本文化研究センターには、今回取り上げたコレクションの他に、「横浜写真」等さまざまな写真資料を所蔵する。長崎大学環境科学部の姫野順一教授によれば、「日本の古写真は幕末・開港期の国際交流の歴史を多角的に照射する」という。こうした観点から、近年、横浜写真の学術資料的価値の評価が高まりつつある。これまで写真表現の歴史の観点からは、横浜写真を「異国の趣味に迎合した商業性の強い内容」とする見方もあったが、最近では写真史の観点からも、またそれ以外の観点からも、横浜写真の学術資料的価値が再評価されてきているといえよう。

また今回の出版は、今後の古写真関係の出版や、データベース構築とインターネット公開等の一種のプロトタイプとなりうる。このコレクションは今後、種々の学術分野から、深く、そして多角的に調査・研究されることと思う。また将来は、このコレクションを核として、網羅的に、あるいは一定の収集方針に基づいてコレクションが一層充実し、研究的・教育的に優れたコレクションに成長するものと信じている。さらに今回の出版を機会に、世界中の研究者が貴重な写真史料を共有できる条件が整備され、今後、国際日本文化研究センターが世界を舞台とした古写真研究の拠点の一つになることを期待する次第である。

今後、古写真や写真史料の調査・研究が公的機関等で進められれば、現在は埋もれている幕末・維新期に撮影された古写真をはじめ、多くの貴重な写真史料が発見されると思われる。また特に、明治後期から大正・昭和にかけてのガラス乾板は、大量に発見される可能性が高い。通常、ガラス写真は一般家庭等で保存するのは困難であり、負担になることが多く、こうした理由から貴重な写真史料が廃棄されてしまうことも少なくないであろう。その意味では、大学や美術館・博物館、あるいはその他の公的な研究機関で、貴重な写真史料を収集し、適切に保存・利用して、後世に伝えていく必要があると考える。

注

1. 当時はまだ、カメラ オブスキュラと呼ばれていた。
2. 当初ダゲールは、ハーシェル (J. F. W. Herschel, 1792~1871) によって発見されたハイポによる定着ではなく、食塩の飽和液を用いて画像を固定していた。
3. タルボットが考案した写真術は、当初フォトジェニック・ドローイングという名称が与えられたが、後に改良が加えられて、カロタイプ（タルボタイプとも呼ばれた）と命名された。
4. 1847年にスイスのシェーンバインとドイツのポットゲルの協同研究によって発明された。この溶液は透明で粘性をもち、けが等の傷口をふさぐのに利用されていたが、アーチャーがその粘性に注目して、そ

れまで使用されていた卵白やゼラチンの代わりに写真感光材料のバインダーに用いるようになった。

5. コロジオンが乾燥するにつれて、感光度が急速に低下する。
6. 後に改良されて1~5分程度に短縮された。
7. C. D. フレドリックス (Charls De Forest Fredericks 1823-1894) 撮影による安田善一郎の銀板写真は、最近、東京大学史料編纂所から発見され、同所古写真研究プロジェクトによって鑑定が行われた。このダゲレオタイプは劣化が著しく、肉眼ではほとんど画像を見ることができないため、東京大学生産技術研究所と同大学史料編纂所との共同研究の結果、赤外線ビデオカメラで撮影した画像をデジタル処理することにより、ある程度画像を復元することに成功、研究成果は、平成12年1月にNHKニュースや新聞各社から報道された。
8. 川崎市市民ミュージアム所蔵の日本人を写した撮影者不詳の銀板写真は、同館学芸員の深川雅文氏の研究により、1850~51年に米国ボルティモアの写真家H. R. マークス (Harvey R. Marks, 1821-1902) が撮影したものである可能性が高いとの説が出てきている。また、現在も深川氏によって写された人物を同定するための研究も行われており、これらの銀板写真については今後も調査・研究する必要が指摘されている。詳しくは深川雅文「ダゲレオタイプに写された日本人」川崎市市民ミュージアム紀要第11集、平成11年3月を参照されたい。
9. 「万延元年遣米使節史料集成第七巻」(風間書房、1961年刊)には、以上に挙げた銀板写真以外にも、日本人を写した銀板写真が現存していることが印されているが、現在は所在がわからなくなっており、現在、所在が明らかとなっている日本の銀板写真は表で示した十数点を数えるにすぎない。
10. オランダ人医師ポンペ・フォン・メーデルフォールト (Pompe van Meedervoort, 1829 - 1908) は、28才のとき、長崎海軍伝習所の第二次派遣隊の一員、軍医、二等士官として来日し、長崎において、医学・諸科学の教育、養生所の建設等において貢献した他、写真の指導者としても影響を残した。
11. 長年ウンシンと呼ばれてきたこの人物は、斉藤多喜夫氏(横浜開港資料館)の調査により、文久年間に横浜に在住した船長出身の写真師で、ニューヨーク生まれのジョン・ウィルソン (Johon Wilson) であることが確認されている。
12. 最近では、「横浜写真」の学術資料的価値が再評価されてきている。
13. 日本ではこの「芸術写真」という言葉が、欧米諸国と少し異なった意味で使用された。すなわちそれは、「芸術としての写真」といった一般的な意味ではなく、明治後期から昭和初期に至る時代に、アマチュア写真家を中心に制作された絵画的効果を重視した写真群を総称して使用された。
14. 『幕末・明治の写真』小沢健志著、ちくま学術文庫、筑摩書房、1997
15. これまで古写真という言葉に、はっきりした定義を与えられた形跡はないが、一般に日本における古写真とは、写真の渡来から明治時代に制作された写真の意味していることが多いように推測される。
16. 吉田成「古写真の調査・鑑定に関する一考察—人物写真を中心に—」東京大学史料編纂所研究紀要第9号、1999を参照。
17. 1枚の大きなネガ(湿板)に8~10枚の肖像を撮り、印画を1枚ずつ切って3.5×2.5インチの小さな画像をやや大きめの台紙に張り付けたもの。1854年にフランスの写真家アンドレ・アドルフ・ディズレリが特許を取得した。
18. 保存上、ケースの解体には賛否の意見があると思われる。もしも解体する場合には、専門家が慎重に判断して、作業に当たる必要がある。
19. *Archives & Manuscripts :Administration of Photographic Collections.* Mary Lynn Ritzenthaler, Gerald J. Munoff, Margery S. Long p. 28.1984

引用・参考文献

飯沢耕太郎

1986『「芸術写真」とその時代』筑摩書房

石黒敬七

1990『写された幕末—石黒敬七コレクション—』明石書店

小沢健志(責任編集)小沢健志・澤本徳美他

1985『日本写真全集1—写真の幕開け—』小学館

小沢健志(監修)

1990『写真で見る幕末・明治』世界文化社

小沢健志

1997『幕末・明治の写真』ちくま学術文庫,筑摩書房

渡辺義雄・小西四郎（監修）小沢健志（編集）

1994『幕末・写真の時代』筑摩書房

鎌田彌壽治

1956『写真発達史』写真技術講座 別巻,共立出版株式会社

小西四郎・岡秀行（構成）

1983『モース・コレクション/写真編 百年前の日本』小学館

小西四郎・小沢健志・沼田次郎（監修）

1986『甦る幕末—オランダで保存されていた800枚の写真から—』朝日新聞社

田中雅夫

1970『写真130年史』ダヴィット社

東京都写真美術館・北海道立函館美術館展覧会図録

1997『写真渡来の頃』

東京都写真美術館展覧会図録

1991『幕末・明治の東京—横山松三郎を中心に—』

徳川慶喜（撮影）・徳川慶朝（監修）

1986『将軍が撮った明治』毎日新聞社

日本写真家協会（編）

1971『日本写真史 1840-1945』平凡社

日本写真機光学機器検協会/歴史的カメラ検査委員会（編）

1975『日本カメラの歴史』（資料編・歴史編）毎日新聞社

日本写真学会画像保存研究会（編）

1996『写真の保存・展示・修復』武蔵野クリエイト

宮地正人（監修）

1996『将軍・殿様が撮った幕末・明治』（別冊歴史読本）新人物往来社

八幡政男

1993『評伝 上野彦馬—日本最初のプロカメラマン—』武蔵野書房

横浜美術館横浜開港資料館（編）

1987『幕末日本の風景と人びと—フェリックス・ベアト写真集—』明石書店

横浜美術館学芸部（編集）

2000『幕末・明治の横浜展』横浜美術館

Coe, Brian (1978) *Cameras from Daguerreotypes to Instant Pictures*. AB Nordbok

（高島鎮雄・宮部甫他訳・北野邦雄監修1980. プライアン・W・コー 著『CAMERAS;From Daguerreotypes to Instant Pictures』朝日ソノラマ）

Daguerre, L. J. M. (1839) *Historique et Description des Procédés du Daguerreotype et du Diorama*. Paris（中崎昌雄解説・訳1998. L.J.M.ダゲール 著『[完訳]ダゲレオタイプ教本—銀板写真の歴史と操作法—』朝日ソノラマ）

Gernsheim, Helmut & Alison Gernsheim (1965) *A Concise History of Photography*. London:

Thames and Hudson（伊藤逸平訳1967. ヘルムート・ゲルンシャイム, アリソン・ゲルンシャイム 著『世界の写真史』美術出版社）

Jenkins, Reese V. (1971) *Images and Enterprise: Technology and the American Photographic Industry*. The Johns Hopkins University Press.（中岡哲郎他 訳1998. リーズ・V・ジェンキンズ 著『フィルムとカメラの世界史—技術革新と企業—』平凡社）

Keefe, Laurence E. and Dennis Inch (1990) *The Life of a Photograph; Archival Processing, Matting, Framing, Storage*. Focal Press

Newhall, Beaumont (1967) *Latent Image*. Educational Services Incorporated.（小泉定弘・小斯波泰訳1981. バーモント・ニューホール 著『写真の夜明け』朝日ソノラマ）

- Reilly, James M. (1986) *Care and Identification of 19th-Century Photographic Prints*. Eastman Kodak Company
- Rempel, Siegfried (1987) *The Care of Photographs*. Lyons & Burford
- Rizenthaler, Mary Lynn, Gerald J. Munoff, and Margery S. Long (1984) *Archives & Manuscripts : Administration of Photographic Collections*. Basic Manual series, The Society of American Archives.
- Rosenblum, Naomi (1984) *A World History of Photography*. Abbeville Press. (大日方欽一・森山朋絵他訳・飯沢耕太郎監修1998. ナオミ・ローゼンブラム 著『写真の歴史』美術出版社)